第 25 号　　平成12年6月1日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行

七鈴五獣鏡

伝木蛇寺本尊

会長　土松新逸

本蛇寺本尊と伝えられている古い木仏像（大和町重要文化財）は現在牧区遠藤仁右衛門家（当主周一氏）に安置されてある。同家に安置された経過について『大和町の文化財』に「本木像は木蛇寺本尊と伝えられており、天文九年（一五四〇）越前朝倉勢が篠脇城へ来襲のときと思われるが、戦禍をさけて牧の山中（現在仏ヶ洞という）へ木蛇寺本尊を移して置いた。のち大洪水で流れ出たのを拾い上げて、妙見神社本殿に安置しておいた。しかし、明治初年神仏分離令の出された際、神主栗飯原家に移して管理していた。

昭和初年栗飯原家の都合により同家の分家土松良三郎が神職を代行することとなり、右仏像を同家へ移し管理していた。その後たまたま、木蛇寺跡に住み、慈永大姉の墓や木蛇寺先祖の墓（天保一四年建立）を管理している遠藤仁右衛門家（当主周一）が、右仏像の世話方を希望し、土松良三郎より同人へ預け現在に至っている」と解説してある。

右良三郎は筆者の父であるが、当時筆者は外地の公務員として勤めていたので郷里のことは詳しくないが、昭和四七年より大和村史編集事務局に勤め、栗飯原家の江戸末期の神職豊後正の手記「万留帳」（大和村史史料編に登載）を解読筆写したが、安政三年（一八五六）二月五日記に右木蛇寺本尊について「当村木蛇寺住日置弥右衛門養父（私実の伯父園七なり）去る秋より病気にて追々大病になり絶食、何れ今日か明日かと申頃、二月五日朝見舞、何分今度は往生と相見へ申候、何ぞ心残りの事も御座候へば、何事もこれ無、もっとも丈夫にて有なれば話合度も有、妙見様に納有し木蛇寺本尊、御本社の宝物にて何共諸人に結縁薄く、是を何としてなり共、諸人の参詣する所へうつし御崇敬申度、此事ばかり心に残り候と申され候、私も日頃其義も思合せ、志有事ゆへ何分幣殿へ移してなり共、又別に小堂を建成共、此事に致し度と申置候、之依託し置」と記してあり、妙見社の神主としても気にしていたようである。そして、「八月一日信心の人々、その内でも当村久右衛門の父の願に付、本蛇寺本尊を幣殿へ下し拝せ候也、参銭三百八拾四文有」と記している。

木蛇寺本尊といわれる古仏を亡父良三郎が遠藤家へ預けて大切に管理していただいていることには感謝するが、出来得れば本蛇寺跡に小堂を建て、心ある人々に参詣していただければ、日置弥右衛門や栗飯原豊後の霊もさぞかし喜んでくれるものと思うものである。

ちなみに、伝木蛇寺本尊仏はそのお姿が地蔵菩薩の様に思われる。東氏が栄えた時代は鎌倉末期から室町期で、地蔵信仰の全盛期であったことを思うと、木蛇寺の本尊が地蔵菩薩であったことは決して不思議でないと思う。この木仏は前方から拝むと勿体ない位お顔がくずれて見えるが、後姿には美しい線も見え、立派な仏像であったことが感じられる。

伝木蛇寺本尊

〈背面〉

小浜国宝巡りに参加して

有代　眞一

寺社や仏像に特別興味がある訳ではないが、若狭の早春と旅の解放感を味わってみたくて参加させてもらった。

近江から小浜へ通じる峠には、車窓間近にまだ残雪があり、杉林は雪害で無惨にも折れていた。その昔、この道も京都へ通じる道の一つであったから、冬の交通はさぞ難儀だろうとその苦難が偲ばれた。

最初に訪れた明通寺は、鎌倉時代の様式を残す三重塔と桧皮葺きの本堂が国宝で、説明書にはその美しさ気高さが書かれていたが、私には、素朴でただ古い建物の尊さだけが感じられた。カジカが棲む近くの松永川からはまだその声は聞かれず、岩を洗う波音と梢を渡る微かな風音だけであった。

次に見学した若狭歴史資料館では、三重塔の模型が朱色に彩色され、建立当時の美しさを示していた。

国分寺は奈良時代に聖武天皇の勅願によって全国に建立された寺の一つだが、幾度かの火災により焼失し、江戸初期に建てられた釈迦堂が立つのみであった。それも長い風雪にさらされ、壁板の一部から空が見える有様だった。だがその中に安座する木造薬師如来座像は、よく保存され、穏やかな表情が私達を和ませてくれた。一帯は伽藍跡が発掘されたというので指定史跡になっているが、往時の七堂伽藍を偲ぶことは難しい。

羽賀寺は行基の開山と伝えられる。入母屋桧皮葺きの本堂が、七分咲きの紅梅を前に室町時代からとは思えぬ堅さで佇んでいた。中に安置されている木造観音像は、行基が元正女帝をモデルに彫ったというふくよかな顔と堂々たる体格と彩色跡から完成当時の艶やかさが容易に想像される。思わずシャッターを押さえる。

二日目は円照寺から。鎌倉時代の木造大日如来座像を参拝してから、江戸時代初期作といわれる庭園を見る。裏山を借景として取り入れた日本庭園独特のものである。

妙楽寺は、杉木立を縫って参道を上ると、左に古く簡素な鐘楼があり、その奥に小じんまりとした寄棟造りの本堂があった。鎌倉期の建立で若狭に現存する最古の建立という。今にも蝉しぐれがしそうな静寂な境内であった。住職は、寺に入る時に鐘を撞(つ)くと「入金(いりがね)」だから有り難

明通寺：国宝の三重の塔

萬　　徳　　寺

いと笑わせたが、私達は帰りに撞いて去った。

万徳寺に上がるとすぐ用意された長椅子に座って全員の記念写真を撮る。寺の配慮か、写真屋との共同営業企画か。ともあれ名園を背に写真に収まる。敷き詰められた白砂と山の斜面にかけてのツツジを見ながら急な石段を上がる。ツツジが咲いていたならどんなに素晴らしい眺めだろうかと思いながら。

最後は神宮寺である。文字通り神仏を祀る寺である。本堂の前にしめ縄が張られている。この本堂は室町時代の建立で、木鼻や妻飾、軒隅の反り、彫刻等が華麗で、さすが若狭随一だと思われた。住職の話がまた面白かった。決めつけて物を考えてはいけない。一旦従来の考えを捨て、初めから考え直すと新しい何かが見えて来ると。宗教についての考えもまた同じだと言う。うなずけることである。

思想の異なる神道と仏教が同居するようになったのは中世のことで、神と仏が習合した信仰が古くからあった。日本の神々はインドの仏菩薩の姿を現したと解し、この思想を基に宗勢を拡充したのが天台宗と真言宗だと言われている。明治維新を迎えて分離されたが、神宮寺のように今日までそれを引き継いでいる寺は珍しい。しかし、実際には日本人の生活の中には神仏は同居している。それが日本人の宗教感である。

若狭の早春といにしえの仏教文化を肌に感じながら、二日間の古寺巡りを終える。同行の皆さんに感謝しながら。

若狭小浜の仏像

井俣初枝

おほろかにもろてのゆびをひらかせて
おほきほとけはあまたらしたり

この歌は、「会津八一」の奈良の大仏賛歌の歌である。「湖のある奈良」と呼ばれるようになった小浜へ、一度行って見たいと常々思っていた。二日間のご縁をいただき、暑くもない、寒くもない、穏やかな日に、仏教文化が、密集する小浜の仏さまに巡り会うことが出来た。

薬師如来をまつる明通寺をはじめ国分寺の釈迦如来坐像、薬師如来像、おそらくこの寺も諸国の国分寺と同じように変転を繰り返して来たようである。羽賀寺・円照寺・妙楽寺・多田寺・神宮寺・万徳寺、どの仏さまも素朴でお顔にのどかな表情をたたえるなどして、この土地の人との信仰を集めてきたんだなと思った。仏さまの前に立ったときだけでもいい。じっくりと我が身をふり返って見ることにしたい。

若狭神宮寺の由来が楽しかった。住職の尽きそうもないながい話。最後は、鈴を買わせられた。音色のいい鈴であった。みんなが買った。鈴が売れてよかったなと思う。あまりお参りする人がないようなお寺であったから。

「類聚国史」によると、養老年中、若狭比古神が仏道修業者となった神主・朝臣赤麿に神身離脱の託宣をした。そこで赤麿は、道場を建立して仏像をまつり修業したので後年疫病を防がれた。そしてここの道場を神願寺「後の神宮寺」と号したとある。神仏習合の神と仏であるからには、当然神宮寺には仏像が祀られ、仏事が修されるという。

また、奈良の東大寺二月堂（お水取り）の香水を送る所として、遠敷（おにゅう）と東大寺の深い関係がよく知られているという。

若狭街道とも、さば街道ともいう。古くより奈良や、京の都とのつながりがあったであろう。薬師如来・観音菩薩・小浜のほとけたち、この地域に密教色の濃い特殊な信仰の存在が、八ヶ寺によってうかがえる。心やすらぐ旅であった。

小浜湾のまっ直ぐが日本海。夭折の女流歌人の碑が海の見える丘に建つという。もう一度訪ねてみたい。

登美子の碑わかさの海に朧なる

重文の木造十一面観音菩薩立像

羽　賀　寺

故 畑中浄園先生をしのぶ

佐藤光一

先生が郡上高校に赴任されたのが昭和三一年四月、私の全日制への赴任は、翌々三三年四月で、先生と私は年齢が丁度一回り違うので、当初は親しいというよりは尊敬すべき大先輩であり、近づき難い存在でもあった。

以来、昭和五一年三月先生がご退職になるまで十八年間いろいろお世話になったが、温厚な先生はいつも穏やかな物腰で同僚ばかりでなく生徒にも接しておられた。そのお姿には、強く打たれるところがあった。

私が特に先生を敬愛するようになったのは、先生が単に温厚なだけの人物ではなく、大正デモクラシーを体現したような自由人であったことだ。見かけは細いお体だが、骨太で、黙々と信ずるところを実践しておられた。

意外に思う方もあると思うが、先生はご在職中ずっと、組合に籍を置いておられた。教育正常化の嵐の中でも、欣然として、というよりも、淡々と、社会科の教師としてまた働く者として組合に参加するのは、ごくあたり前の事と、なんら気負っておられる様子はなかった。

二度目にご一緒することになったのは平成元年、退職してやっと並に大和町文化財保護協会の会員として活動に参加できるようになった時だった。先生は副会長として、ご活躍になっておられた。以前と少しもお変わりになっていないお人柄に接して本当に嬉しかった。

平成二年一二月に先生を中心に大和町郷土史研究会が結成された。会員数こそけっして多いとはいえないが、先生のご尽力のお陰で、会は着実に前進し、その成果は三冊の会報「史苑やまと」に収められている。中でも先生の理路整然とした、力強く的確な論説は、郷土を愛された先生のお姿をいつまでも私たちの心のうちにとどめることを疑わない。

平成四年の当初、先生から大和町史史料編続編の編集に参加しないかというお誘いを受けた。その切実なお心に打たれて委員の末席を汚すことになった。当時のことを『史料編続編上』の編集後記に次のように書いておられる。少し長くなるが引用することにする。

「(前略)このように、この史料編(注、前の史料編)は紙面を圧縮するため相当無理をして刊行されたのである。その後、通史編上巻(昭和五九年九月刊)同下巻(昭和六三年一二月刊)の出版が終わり、編集委員会は解散した。長い年月に亘る重い荷物が肩から下りたのである。

しかし、その安堵感と同時に、先に刊行された史料編の積み残しの史料が気掛かりとなった。平成三年一〇月に野田前委員長が逝去(八四歳)されると、この思いは一層深くなった。年月を経るにつれて、せっかく集められた史料も散逸する恐れもあり、また、前史料編発刊後に新しく発見された史料もある。故委員長の意志を忖度(そんたく)すると、奉仕作業ででも、続編を作成すべきでなかろうか、旧委員の数名がこのような思いで一致した。(後略)」

このような思いで心血を注いで編集に打ち込んでおいでになったのに、その完成をご覧になることなく逝去されてしまった。

私たちは仮綴じの一冊を御霊前に捧げたが、悔しさは筆舌に尽くし難い。残された者の務めとして、ご意志を受け継いで事業の完成を目指したいと思う。

いま改めて、先生の編集になる本紙前号を見るに、先生の「後記」のお言葉が心に沁みて、人の世の無情に打ち拉がれる思いである。先生のご冥福をお祈りするのみである。

若狭国分寺　重文 薬師瑠璃光如来像

本年新たに指定された大和町の文化財

無形民俗文化財

一、大間見白山神社の大神楽

大間見は以前から白山神社へ奉納していた大神楽を、安永二年（一七七三）に白鳥町野添貴船神社へ伝授し、神路の小十郎（森正紀家の先祖）が伊勢から習って来た大神楽を伝授されたと伝えている。既に使用している小太鼓に安永七年七月の記があり、安永年間に新しく大神楽を習ったことが考えられ、その後嘉永年間（一八四八～五四）に氏子坪井・古田の両名を伊勢へ派遣して四カ月間にわたって神楽の技を修得させ、大神楽を充実させたことを伝えている。

このようにして大間見では大神楽を充実させており、その後明治五年（一八七二）以後、大和町剣、小間見へ、また、白鳥町二日町などへ伝授しており、大間見大神楽は大神楽の総師というべきものである。

重要文化財

二、古瀬戸三耳壷

平成一〇年白雲山古墓群の盛土の崩れから出土したもので、鎌倉末期から室町時代初期のものである。器高二七㎝、口径一二㎝位（破損している）、底径一〇・五㎝で、高台はハの字型である。鉄分の多い枯葉釉がかかっており、肩と胴に九条の線がある。

白雲山古墓群から、以前に古瀬戸四耳壷・三耳壷・瓶子・どびん等が出土しており、いずれも大和町重要文化財に指定されている。

平成十一年度　事業報告

4月27日　執行部会開催（役員会・総会の事案）
5月31日　役員会（総会の事案他）、監査会
　会報「文化財やまと」第24号の発行
6月7日　執行部会、総会ならびに研修会について
　総会ならびに講演会
28日　総　会：10年度会務・会計報告、11年度予算・事業計画、役員改選（全員留任）
　講演会：「古い地名あれこれ」講師・佐藤とき子氏
7月12日　執行部会、木蛇寺史跡標柱の設置および案内板の設置
31日　東氏館跡庭園池泉等の清掃及び阿千葉城跡の清掃管理作業の実施
8月7日　薪能協賛および文化財関係の来客に対応
10月21日　執行部会の開催（役員会・日帰り研修について）
11月6日　役員会の開催（日帰り研修の計画）
11月18日　日帰り研修の実施：葛井寺千手観音と法隆寺夢殿救世観音拝観（38名参加）
12月18日　役員会（於：やまつじ）
　11年度会務・会計中間報告、一泊研修について（小浜市の国宝めぐり）、書記に佐藤光一、会計に大井正明両人を承認
2月24日　執行部会の開催（一泊研修について）
3月3日　役員会の開催（一泊研修旅行の最終計画）
4月2日～3日　一泊研修旅行の実施（福井県小浜市の羽賀観音など国宝めぐり七寺、など）（参加者29名）

●平成11年度中の物故者

11年11月9日　山　田　昌　枝　さん
〃　12月12日　小　野　江　選　量　さん
12年2月26日　畑　中　浄　園　さん　謹んでご冥福をお祈り致します。

平成十二年度　事業計画（案）

4月　執行部会開催（役員会・総会の事案）
5月　役員会（総会の事案他）、監査会、会報「文化財やまと」第25号の発行
6月　執行部会、総会ならびに研修会（講演会の開催）
7月　執行部会
30日　東氏館跡庭園池泉等の清掃及び阿千葉城跡の清掃管理作業の実施
8月　薪能協賛及び文化財関係の来客に対応
9月　執行部会の開催、役員会の開催、町内指定文化財の視察計画、文化財展示・収蔵館建設促進委員会
10月　執行部会・役員会の開催、日帰り研修の計画、町民祭への参加
11月　執行部会、日帰り研修の実施
12月　役員会、一泊研修の計画
2月　執行部会の開催、一泊研修の広報
3月　役員会の開催、一泊研修旅行の実施

以上のほか、本会の目的に参考となる展示会、発表会のイベントには検討の上計画外でも積極的に参観・参加の機会をとらえることとする。

大和町文化財保護協会規約

第　一　章

（名　称）

第１条　本会は、大和町文化財保護協会と称し、岐阜県文化財保護協会大和町支部とする。

２　本会は、事務所を大和町教育委員会に置く。

（目　的）

第２条　本会は、県本部と連絡を密にし、各専門委員の協力を得て、本地域の文化財の保護、顕彰及び活用に努めるとともに、会員相互の研究を深め、もってこの地域住民の文化の向上に資する。

（事　業）

第３条　本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、文化財の保護、顕彰及び活用に関すること

二、文化財の調査、研究

三、文化財に関する講習会、研究会、文化財めぐり等の開催実施

四、その他本会の目的を達成するために必要な事業

第　二　章

（会　員）

第４条　本会の会員は次の通りとする。

一、正会員　本会の目的に賛同し会費年額2,000円を納めるもの

二、家族会員　前号の会員の家族で、会費年額1,000円を納めるもの

三、特別会員　本会の事業を後援し、特別会費年額一口3,000円以上を納入するもの

四、賛助会員　本会の事業に賛助し、賛助会費年額一口10,000円以上を納入するもの

（入　会）

第５条　会員になろうとするものは、年会費を事務所に納入することでその資格を得る。

第　三　章

（役　員）

第６条　本会には次の役員を置く。

理事30名以内（内　会長一名、副会長二名）とする。監事二名。

２　理事、監事は、総会でこれを選出する。

３　会長、副会長、理事の互選とする。

（任　務）

第７条　会長は、本会を代表し、会務を統括する。

２　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。

３　本会の事務を処理するため、書記、会計を置き、理事の中から会長が任命する。

４　理事は、理事会を組織し、会務の運営にあたる。

５　会長、副会長、書記、会計は、執行部を構成し、会務の執行にあたる。

６　監事は、会計を監査する。

（任　期）

第８条　役員の任期は二年とし、再選を妨げない。

（顧　問）

第９条　本会は、会長の推薦により、総会の議を経て顧問を推載することができる。

第　四　章

（会　議）

第10条　執行部会、理事会は、必要の応じて会長が召集する。

２　総会は毎年一回、会計年度終了後一ヶ月以内に会長が召集する。ただし、会長または理事会が必要と認めた場合には、臨時に総会を招集することができる。

（決　議）

第11条　総会及び理事会の決議は、出席者の過半数をもって決する。

（重要事項）

第12条　次の事項は、総会に提出し、その承認を受けなければならない。

一、事業計画および収支予算についての事項

二、事業報告および収支決算についての事項

三、その他、理事会において必要と認めた事項

第　五　章

（経　費）

第13条　本会の運営に要する経費は、会費、事業に伴う収入、寄付金及び補助金などをもって支弁する。

２　会費の中から、理事の人数分の会費を県本部に納入する。

（会計年度）

第14条　本会の会計年度は毎年４月１日に始まり翌年３月31日に終わる。

第　六　章

（その他）

第15条　この規約に定めるもののほか、本会の運営について必要があるときは、総会に諮って細則を設けることができる。

付則

１．規約の変更は、総会の決議による。

２．この規約は昭和52年７月29日から施行する。

文芸欄

短歌

町史刊行に思う

土松新逸

いただきし東氏史料を柱とし町史
上巻先ずは成りたり

編集はボランティアに始めたる町
史続編成り感激す

刊行を目前に逝きたまいたる委員
長の霊前に先ずお供えす

笑みませる遺影は共に苦しみし日
を語りますただ涙なり

刊行を見るなく逝きし友もありま
だなつかしき笑顔残れる

花の咲くころには刊行お祝いに行
かなと笑い語りあいたる

浄園先生を悼む

井俣初枝

眼裡(まなうら)にやゝ首かしげ師のありて「拈華微笑(ねんげみしょう)」風花の舞う

灰皿の一つが机上に置かれあり主
なきままに講義はじまる

連綿を歴史はつづき永劫なり「和
顔愛語」の人の顕(た)ち来る

残雪の白山連峰動かざる歳歳年年
人同じからず

春爛漫師の声いまだ残りいて年年
歳歳花あい似たり

畑中浄園先生を悼む

桑田和子

たずねられ慈しまれし文化財遺徳
とともに永久(とわ)に光るも

シベリアの果まで満ちし御慈悲に
雪も哀しむ師の示寂なり

今日も愚痴こぼしましたと御遺徳
に詫びるこころの手を合すなり

雑詠

人はあゆむ孤独の道を空気という
かたちなきものを吸いては吐きて

小さきは小さき音して引かれくる
草は小さき実をこぼしつつ

短歌

小浜文化財を訪ねて

土松新逸

薬師瑠璃光如来の影像ていねいにしまいて若狭国を後にす

花のころもう一度訪いたしと春浅き桜の下に念ずる

元正女帝の御姿と仰ぐ羽賀寺の十一面観音菩薩様なる

お水取りに使われるとう若狭井の水清らけく豊かに流る

年余年むかしを語る宝塔は善男善女に仰がれてたつ

お水送りの淵・鵜の瀬

俳句

竹炭窯

本田村人

万緑や窯止の火のむらさきに

窯止の煙の行方青嵐

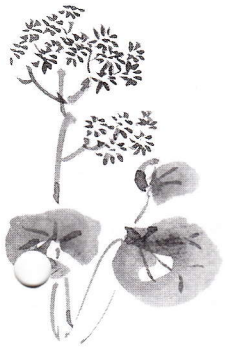
窯出しの竹炭に浮く傘印

窯出しの炭に残れる鉈の傷

窯止の煙うすれて大西日

末黒野の横一文字右下り

名文を宙になぞりて蓮如の忌



世の中

高橋義一

横断の蛇や周章(あわ)てず急ブレキ

雨を切りワイパーを切り燕返し

熊蜂に見惚(みと)れ袖引く妻ありぬ

妻笑ふとき首っ玉毛虫刺す

青鷺の猟や一瞬わが眼撃つ

訃報急青葉裂き朝餉(あさげ)散らしけり

緑蔭の読経六道を掃(はら)ひけり

五月晴れ四道を担(にな)ふ棺(ひつぎ)かな

四十九日三塗(さんず)を蛍と渡る由

えにしだに揺るる世の中真っ黄色

平成十二年　四月末現在

会員名簿

（順序不同）

― 剣 ―

山下運平（顧問）八八・一一四〇六
籏　勝美（顧問）八八・二一〇三一
村瀬喜八　八八・二一一二八
河合俊次（理事）八八・一二二四六
畑中澄子（理事）八八・二一五〇七
畑中定夫　八八・二一一六八
小池久江　八八・二一五七六
山下ふみえ　八八・三一二二七
加藤正恵　八八・二一一〇七
高橋　明　八八・二一四八八
日置照郎　八八・二一〇七二
加藤文蔵　八八・二一八〇二
佐藤光一（理事・書記）八八・三一二〇一
田中　和久　八八・二一二〇〇
高橋義一（副会長）八八・三一七九二
河合　恒　八八・二一三五八
河合芳英　八八・二一三〇四
加藤小弋　八八・二一三二九
奥村千代子　八八・二一〇二二
田仲龍子　八八・二一三六一
山下照代　八八・二一四〇六
畑中節子　八八・四一五六
佐藤八重子　八八・三一二〇一
畑中文子　八八・二一三四一
畑中初枝　八八・三一四七四
新蔵　守　八八・二一三七五
野田八重子　八八・二一一六二
高橋叙子　八八・三一七九二
佐藤富貴子　八八・二一八八九
山本みね子　八八・二一六七一
野田三枝子　八八・三一二六九
山田しずえ　八八・三一二九六
岩崎扶美子　八八・三一五二一
河合利雄　八八・三一五二〇
河合美弥子　八八・三一五二〇

― 大間見 ―

村井正蔵（監事）八八・二一三二三
青木新三　八八・二一四三六
日置　繁　八八・二一二五四
大野紀子　八八・二一二三〇
野田英志（理事）八八・二一二八五
清水一作　八八・三一〇八六
池田充彦　八八・三一〇九〇
小野江勉　八八・二一七二五
日置智恵子　八八・三一〇五一
坪井政夫　八八・四一〇九二
松井賢雄（理事）八八・三一九九一
古田　忠　八八・四一〇九〇
藤代順行　八八・三一〇六〇
大野一道　八八・二一二三〇
玉木吉郎　八八・三一四一五
青木ふじ枝　八八・二一二〇三
小野木花子　八八・二一七四七
青木ユリ子　八八・三一四七七
日置哲夫　八八・四一五一九

― 小間見 ―

平沢　勤（理事）八八・三一九三七

― 万　場 ―

畑中真澄　八八・二一四四一
石神尭生　八八・二一四一三
稲葉春吉　八八・二一五〇三
黒岩きくゑ　八八・二一四六〇
筧　明代　八八・二一五三二
三島秋男（理事）八八・二一四六一
桑田和子　八八・二一四一九
桑田渥見　八八・二一四四六
桑田信夫　八八・二一四一八
黒岩弘美　八八・二一四五八

― 河　辺 ―

井俣初枝　八八・二一七五八
青地正男　八八・二一四四七
大井静子　八八・二一三三八
大井正明（理事・会計）八八・二一八九四
桑田アサ子　八八・二一四三九
井上妙子　八八・三一五〇八
沢原　勝　八八・三一一五〇
山田武司　八八・二一四七五
山田和美　八八・三一六三一
籏　清子　八八・四一七〇
山田敬子　八八・三一九一七
大井ともゑ　八八・二一八九三
井俣赫美　八八・二一七五八
三輪孝子　八八・二一七八二

― 徳　永 ―

木　島　泉（理事）八八・四一八二
鷲　見　清（理事）八八・二一〇〇五
鷲見おと　八八・二一一八九
矢野原幸子（理事）八八・二一〇七七
水野志づ子　八八・二一六一〇
山内孝一　八八・二一六一六
木島洋女　八八・二一五九一
土松新逸（会長）八八・二一七三一
遠藤賢逸　八八・二一一二一
渡辺明夫　八八・二一六九五
木島三郎　八八・三一五九〇
矢野原吉夫　八八・二一一三九
村瀬弥一（理事）八八・二一六〇二
渡辺文子　八八・二一六九五
遠藤冨貴子　八八・二一一二一
山内喜久子　八八・二一六一六

― 河　辺 ―

清水幸江　八八・二一〇一九
横枕千代子　八八・二一三四九
清水美佐子　八八・二一〇二一
前田　孝　八八・二一一〇一
前田　鈴　八八・三一六六六
臼田とも子　八八・二一二五〇
臼田百合子　八八・二一〇四六
前田和美（理事）八八・三一六六六
岩谷千代子　八八・二一一一一
横枕七右衛門　八八・二一三四九
尾藤元子（理事）八八・二一一四七
前田とせ子　八八・二一一〇一
尾藤　清　八八・二一一四七
鷲見長子　八八・二一〇二八
熊田冨子　八八・二一六七九

― 神　路 ―

森　忠敬（顧問）八八・二一〇八三
臼田宝徳　八八・三一七三〇
羽生　清　八八・二一二七一
山田真人（理事）八八・二一一一四

― 牧 ―

金子政子　八八・三一四二六
滝日準一（理事）八八・二一七〇五
粟飯原常人　八八・二一三六二
日置貞一　八八・二一六六二
土松貞二　八八・三一九八〇
日置　昇　八八・三一六三六
遠藤米吉　八八・三一六三七
遠藤光平　八八・三一九八一
遠藤周一　八八・二一八九〇
滝日義一（理事）八八・三一〇六二
滝日　治　八八・三一四〇六
田口勇治　八八・三一九五〇
斎藤太門　八八・三一九二二
松森　茂　八八・三一九二三
加藤一男　八八・二一八七〇
清水　定　八八・二一七一〇
日置元衛　八八・三一四一七
粥川　溜　八八・三一三七八
本田欽一（理事）八八・三一一六〇
野田嘉明　八八・三一〇四三
尾藤佐紀子　八八・二一三五三
加藤登美子　八八・二一八七〇
滝日和子　八八・三一〇六二
遠藤甲子男　八八・三一九三五
早瀬ふみ子　八八・三一三二七

― 栗　巣 ―

島崎増造（監事）八八・二一二三六
増田洋子　八八・四一〇四一
筧政之助（理事）八八・四一〇三一
中山周左ェ門　八八・二一七二八
武田信康　八八・二一二八四
鷲見豊夫　八八・二一七八八
野田光誠　八八・四一〇二七

― 古　道 ―

細川　優（理事）　八八-二八六一
清水克巳　八八-二八六二
清水行雄　八八-三九〇八
歳藤堅正　八八-三九七九
清水久子　八八-三九〇八
稲葉君枝　八八-二八六三
平沢えるる　八八-三八七三

―名誉部―

有代真一　八八-三七九一
有代和夫　八八-二二〇一
森下正則　八八-三四一三
佐尾チドリ（理事）　八八-三五四四
鷲見昭三　八八-三四三一
永谷正子　八八-二六五四

―島―

森藤雅毅（理事）　八八-二六八四
須甲甚一　八八-二六六七
山田長次　八八-三六四八
森　数雄　八八-二五五四
田中　篤　八八-二七九二
奥田昌明　八八-二五二〇
直井篤美　八八-二六二二
此島修二（理事）　八八-三六五九
雉野尚子（理事）　八八-三五六四
遠藤利雄　八八-三五二六
石井敏子　八八-二五〇二
此島吹子　八八-四〇九五

平成11年度　決　算　書

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	24,705	24,705	0	
会費	1,937,000	1,394,500	△542,500	
会員費	325,000	328,000	3,000	正会員 2,000×156 家族会員 1,000×16
特別会員費	1,612,000	1,066,500	△545,500	日帰研修 293,500 宿泊研修 755,000 役員会 18,000
補助金	100,000	100,000	0	大和町より
寄付金	1,000	50,000	49,000	
諸収入	295	51	△244	普通預金利子
合計	2,063,000	1,569,256	△493,744	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	80,000	29,764	△50,236	
総会費	50,000	15,000	△35,000	
役員会費	30,000	14,764	△15,236	
事業費	1,842,000	1,378,120	△463,880	
研修費	1,747,000	1,285,720	△461,280	日帰研修 323,500 宿泊研修 770,000 役員会 23,000 研修助成 169,220
会報発行費	75,000	92,400	17,400	
事業費	20,000	0	△20,000	
事務局費	2,000	0	△2,000	
消耗品費	1,000	0	△1,000	
通信費	1,000	0	△1,000	
旅費	0	0	0	
県本部会費	72,000	74,000	2,000	
積立金	60,000	60,000	0	
予備費	7,000	15,030	8,030	
合計	2,063,000	1,556,914	△506,086	

平成12年度　予　算（案）

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
前年度繰越金	12,342	24,705	△12,363	
会費	1,934,000	1,394,500	539,500	
会員費	322,000	328,000	△6,000	正会員 2,000×154 家族会員 1,000×14
特別会員費	1,612,000	1,066,500	545,500	日帰研修 8,000×40 宿泊研修28,000×40 役員会 2,000×20 促進委員会6,000×22
補助金	100,000	100,000	0	大和町より
寄付金	1,000	50,000	△49,000	
諸収入	158	51	107	普通預金利子
合計	2,047,500	1,569,256	478,244	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
会議費	60,000	29,764	30,236	
総会費	40,000	15,000	25,000	
役員会費	20,000	14,764	5,236	
事業費	1,847,000	1,378,120	468,880	
研修費	1,712,000	1,285,720	426,280	日帰研修 320,000 宿泊研修 1,120,000 役員会 40,000 促進委員会 132,000 研修助成 100,000
会報発行費	80,000	92,400	△12,400	
事業費	55,000	0	55,000	町内文化財見学費（500×110）
事務局費	2,000	0	2,000	
消耗品費	1,000	0	1,000	
通信費	1,000	0	1,000	
旅費	0	0	0	
県本部会費	64,000	74,000	△10,000	
積立金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予備費	14,500	15,030	△530	
合計	2,047,500	1,556,914	490,586	

収入 1,569,256円 ― 支出 1,556,914 ＝ 12,342円
（次年度へ繰り越し）

積立金会計　合計金300,000円（平成7・8・9・10・11年度各60,000円）

編集後記

●「往時渺茫（びょうぼう）　都（すべて）て夢に似たり」云々、これは本紙編集委員長であった故畑中浄園師が前号の編集後記に書かれた書き出しの一節ですが、いま、その後記を読み返しつつ涙をこらえることが出来ません。現実というものの悲しさ、やるせなさをしみじみと感じております。

●会報二十五号をおとどけすることになりましたが、浄園師にかわって急遽編集に当たり、自らの不如意さをしみじみと感じております。

●今春の文化財研修旅行は、若狭国宝めぐりで大変勉強になり、ありがたい旅でありました。多くの尊い仏像を拝観できましたことを嬉しく思い出しております。

●ご多忙の中を、原稿をお寄せ下さった皆さんに厚くお礼申し上げます。

●梅雨の季節になりましたので、お体を大事にされますよう、会員皆様のご健康をお祈り申し上げます。

（土松　記）

「文化財やまと」第二五号　平成十二年六月一日発行　発行者／大和町文化財保護協会　代表者／土松新逸　印刷者／白鳥印刷